

被助成者 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター⑩

コード番号：04-A-104

要約 800 字

**活動の目的**

- ① 中国ハンセン病療養所入所者との個人的な信頼関係を通して、ハンセン病の問題を考え、取り組む日中の若者の育成
- ② 個人的な信頼関係を通して、日中問題を考え、将来の日中友好を担う日中若者の育成

**活動の内容と方法**

中国広東省西部に位置するハンセン病療養所藤橋医院での施設内生活インフラ工事（屋根の修復・水道設備修復）を通して日中学生とハンセン病療養所入所者との交流をはかる。

活動の状況をまとめたハンセン病啓発パンフレットを作成し、その配布を通して中国ハンセン病問題に対する啓発活動を行なう。

**活動の実施経過（主要なもの）**

2004 年

- |             |  |
|-------------|--|
| 5 月～7 月     | ハンセン病学習会   |
| 8 月 18～25 日 | 藤橋医院内家屋修復工事ワークキャンプ、入所者との交流会、生活状況など聞き取り               |
| 8 月 27～30 日 | 「日中韓学生によるハンセン病支援国際ネットワーク構築会議」出席（主催：FIWC 関東委員会、於中山大学） |

2005 年

- |             |  |
|-------------|--|
| 2 月 9 日     | ハンセン病啓発パンフレット「若者、『ハンセン病』に出会う」完成          |
| 2 月 11～19 日 | 藤橋医院内水道設備修復工事ワークキャンプ、入所者との交流会、生活状況など聞き取り |
| 2 月 20～25 日 | ハンセン病療養所タンチャン医院、グアンチュ医院生活状況調査実施          |

**活動の成果**

このプログラムに参加した学生が、主体的に新たなハンセン病療養所（外部からの支援が伸びていない療養所）を訪れ、現地ニーズを療養所入所者ひとりひとりから聞き、新たな支援プログラムを計画し始めた。

また作成したパンフレットをハンセン病に関わりのある全国の大学教員・マスコミ・ハンセン病快復者などに配布したところ、大きな反響があった。中国のハンセン病に対するまなざしがすこしずつ日本の中で芽生えようとしている。

**活動の課題**

今後、大学プログラムの手を離れ、中国ハンセン病療養所におけるプログラムを自力で立ち上げようとする日中学生に対する支援の強化。

被助成者 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ㊦

コード番号：04-A-104

本文 8000 字

活動の目的

- ① 中国ハンセン病療養所入所者との個人的な信頼関係を通して、ハンセン病の問題を考え、取り組む日中の若者の育成
- ② 個人的な信頼関係を通して、日中問題を考え、将来の日中友好を担う日中若者の育成

「らい予防法」廃止、国家賠償訴訟におけるハンセン病快復者側の勝訴判決など、ハンセン病をめぐる状況はここ近年、めまぐるしく変化した。しかし、2003 年黒川温泉でハンセン病快復者が宿泊を拒否されるという象徴的な事件がおきた。この事件は、入所者側のホテル謝罪文受け取り拒否や、ホテルの廃業などを引き起こしその結果、多くの抗議文がハンセン病療養所に寄せられることになった。その抗議文は、ハンセン病療養所菊池恵楓園がまとめた「差別文書綴り」に詳しいが、その中で、「ハンセン病がうつらないのは分かっている。だけどお前たち（ハンセン病快復者）とは、一緒にフロには入りたくない！これが国民の本音だ！」という内容の文書があった。

この内容は、教育機関に身をおく者として、深く考えさせられる内容であった。

これまでさまざまな人権関連機関が、ハンセン病啓発活動において行なってきたハンセン病に対する正しい知識の普及

－ハンセン病は容易には感染しません。

－万が一感染しても特效薬によって完治します。

－ハンセン病療養所に暮らす人はハンセン病は完治しています

などの文言は、差別や偏見を打開していくためには不十分であったのではないかとの疑問が芽生えた。事実、先の抗議文の送り主も、ハンセン病がうつらないのは知っているのである。その中でハンセン病の問題をいかに、学生など若い世代に伝えていくか、ということは教育機関に突きつけられた重い問いである。

この問題は、差別的な文書を投書した人や、宿泊を拒否したホテル側が問題として取り上げられがちだが、もうひとつ重要なのは、ホテルで宿泊を拒否されるハンセン病快復者を見ながら、ホテルのフロントに対して誰も疑問の声を上げなかった、一般の宿泊客である「普通の人々」である。そしてそこには潜在的に私たちひとりひとりも含まれる。

わが国におけるハンセン病の歴史は、医学的根拠を失った後も強制隔離を強行した国の過ちであると同時に、それを黙認し続けてきた「一般の普通の人々」の犯した過ちでもある。

本事業はこのような問題意識に立ちながらも、教育機関としてハンセン病問題に取り組むひとつの試みとして、「差別撤廃」「共生社会の実現」「人権尊重」と

いう巨大なスローガンをあえて前面に掲げない。「大きな言葉」を通してではなく、実際にハンセン病快復者と出会い、一緒に生活することを通じて、そこからハンセン病を考える、というアプローチをとる。

ハンセン病に対する差別といった人々の内面に関わる問題には、教条主義的に人権意識を植え付けようとしても、思うような効果はあがらない。それよりもむしろ、ハンセン病療養所に泊り込み、土木作業をすることを通じて、ハンセン病快復者と出会い、友好をあたため、そこからハンセン病の問題、差別と偏見を考える機会を日中の大学生に提供することを目的とした。

抽象的な言葉を先に掲げるのではなく、最初に出会いの場をもうけ、そこで出会った人との信頼関係を土台として、抽象的な問題を考えるというアプローチは本事業の場合、ハンセン病の問題に限らず、日中の歴史理解、中国人の若者の反日感情などの問題にも影響を及ぼす。ハンセン病の問題も、日中理解の問題も、その土台となるべきは、抽象的な思考ではなく、ごく個人的な信頼関係にあるはずである。

そしてその最終的に育成する具体的人間像は、ホテルで宿泊を拒否されるハンセン病快復者や他の被差別者の姿を見たとき、「いやいや、いいじゃないですか。一緒に泊まりましょうよ！一緒に愉快地温泉に入りましょうよ」とホテル内で言うことのできる「一般の普通の人間」であり、また個人的な信頼関係をもとにして日中問題を考えることのできる日中の若者である。

## 活動の内容と方法

活動は大きく分けて、3つの段階に分けて行なった。第一段階は中国での実習に入る前に、ハンセン病に関する基本的な知識を得るための学習段階。第二段階は、実際の中国のハンセン病療養所での活動実施段階。第三段階は、その活動を写真展、冊子作成、活動報告会の開催などの広報を行なう段階、の3つである。

夏の中国での実習に先がけて、ハンセン病を学ぶ各種のイベントを開催した。

### 1、学習段階

まず、5月から週一回の割合で、ハンセン病に対する理解を深めるための勉強会を開催した。内容は、日本におけるハンセン病の歴史、中国におけるハンセン病の歴史などを担当教員が講義し、その講義の後には、学生がゼミ形式で発表を行なった。学生による発表の内容は、「近代以前のハンセン病」「映画の中で描かれるハンセン病」「ジャーナリズムとハンセン病」「中国のNGOのハンセン病に対する取り組み」など。

また6月13日に、東村山市の国立ハンセン病療養所内にある高松宮記念ハンセン病資料館を見学した。その際、(特活)IDEAジャパン(統合・尊厳・経済向上をめざす国際ハンセン病患者・快復者協議会)理事長の森元美代治氏にガイドをお願いした。

### 2、活動実施段階

これらのハンセン病に関する事前学習を経て、8月18日から25日にかけて、中国広東省西部に位置するハンセン病療養所藤橋医院での実習を開始した。実習内容は、療養所入所者の暮らす家屋の屋根に断熱材を敷設する工事のほかに、日

本人学生と中国人学生がペアになり、入所者のお宅で生活状況などの聞き取り、雑談などを行なった。このほかにも、療養所内の娯楽室にて、日中学生共同で入所者を招待し、交流会を開催した。

27 日からは中国中山大学にて、他のハンセン病療養所で活動をしている団体とともに、「日中韓学生によるハンセン病支援国際ネットワーク構築会議」に参加した。この会議には、療養所入所者も招待し、それぞれの活動状況を報告し、また今後の課題などについて話し合いがなされた。

また、秋口の広報活動をへて、2月11日から25日にかけて、再度同じハンセン病療養所にて同様のワークキャンプ(工事内容は水道施設の修復)を行なった。その際、引率者も同行したが、プログラムの運営は、引率者ではなく、夏のプログラムにも参加した日中の学生がリーダーシップをとり、無事ワークキャンプを成功させた。

### 3、広報段階

中国のハンセン病の現状や、学生たちの取り組みをひろく社会に喧伝する目的で、下記のような広報活動を行なった。

#### ・ 早稲田大学商議員会での活動報告(11月13日)

早稲田大学校友(OB,OG)からなる商議員会の分科会内で、中国ハンセン病療養所での活動を紹介した。報告は引率教員ではなく、学生によって行なわれ、学生の素直な感想が聞こえる報告となった。商議員のメンバーにも、ハンセン病に関して詳しく知らない者もあり、ハンセン病に対する正しい知識の普及といった面で有意義であった。また商議員にとって、後輩にあたる今の大学生が、熱心にハンセン病の問題に取り組む姿は強い印象を与えた様子だった。

#### ・ ハンセン病写真展「藤橋村の仲間たち」開催(12月4~10日)

早稲田大学構内の教室を1週間貸しきり、写真展を開催した。大学構内で開催したこともあり、300名以上の集客があった。写真の内容も、藤橋医院入所者の笑顔が目立つ写真がそろっており、来場者からは、「今までの暗いハンセン病のイメージが変わった」との声が聞かれた。

#### ・ 早稲田大学全学共通科目「人権への視座」での活動報告(12月9日)

早稲田大学の全学部生、および国内協定校学生が受講可能な科目「人権への視座」(受講生約200名)にて、中国ハンセン病療養所での活動を紹介した。これも引率者・学生二名で報告を行い、学生の声が反映されるよう工夫しておこなった。

#### ・ ハンセン病啓発冊子「若者、『ハンセン病』に会う」発行(2005年2月9日完成)

中国のハンセン病療養所での日中学生の取り組みを冊子としてまとめた。作成方針として、ハンセン病の暗いイメージをできるだけ出さず、日中学生とハンセン病療養所入所者との交流を通じた笑顔が前面に出るよう工夫した。この冊子は、「ハンセン病検証会議」委員をはじめとして、ハンセン病にかかわりのあるジャーナリスト、大学教員、医療関係者、そして学生に配布した。なお、現物のパンフレットを添付した。

#### ・ 中国ハンセン病療養所入所者聞き書きの編集

ワークキャンプ中、日中の若者は、ハンセン病療養所入所者のお宅を訪問し、聞き取りを行なった。その聞き取り内容を中国人学生に筆記してもらい、それを日本語に翻訳した。翻訳したものは、本学において筆者の担当する全学共通科目「ボランティア論」（受講生 290 人）「人権と市民活動・ボランティア－ハンセン病を通じて」（受講生 23 人）の受講生をはじめとする人々に配布予定である。

## 活動の実施経過

### 2004 年

- 5 月～7 月 ハンセン病に関する事前学習会（週一回 90 分）
- 6 月 13 日 多磨全生園ハンセン病資料館見学（案内：IDEA ジャパン理事長 森元美代治）
- 8 月 18～25 日 藤橋医院内家屋修復工事ワークキャンプ、入所者との交流会、生活状況など聞き取り
- 8 月 27～30 日 「日中韓学生によるハンセン病支援国際ネットワーク構築会議」出席  
（主催：FIWC 関東委員会、於中山大学）
- 9 月 24～25 日 藤橋医院内家屋修復工事ワークキャンプ反省会合宿（於早稲田大学鴨川セミナーハウス）
- 11 月 13 日 早稲田大学商議員会での活動報告（参加学生による報告）
- 12 月 4～10 日 ハンセン病写真展「藤橋村の仲間たち」開催（於早稲田大学）
- 12 月 9 日 早稲田大学全学共通科目「人権への視座」での活動報告（引率者・参加学生による報告）

### 2005 年

- 2 月 9 日 ハンセン病啓発パンフレット「若者、『ハンセン病』に出会う」完成  
「ハンセン病検証会議」委員をはじめとする識者に送付
- 2 月 11～19 日 藤橋医院内水道設備修復工事ワークキャンプ、入所者との交流会、生活状況など聞き取り
- 2 月 20～25 日 ハンセン病療養所タンチャン医院、グアンチュ医院生活状況調査実施
- 4 月 3 日 国立ハンセン病療養所多磨全生園にて入所者とともにお花見会
- 4 月 10 日 早大通りにて、ハンセン病快復者子弟の奨学金集めを目的としてフリーマーケット開催
- 4 月 16 日 中国のハンセン病問題に取り組む他団体との合同活動報告会開催（於早稲田大学）
- 4 月 27.28 日 新入生を対象にした中国ハンセン病支援活動報告会開催（於早稲田大学）

## 活動の成果

### 中国ハンセン病療養所入所者に対する効果

「中国ハンセン病療養所支援プロジェクト」は 2003 年より開始されたが、本年

2月のワークキャンプは、日中の学生にとって、3度目の藤橋医院訪問となった。1958年に設立されて以来50年近く、藤橋医院に若者の往来はほぼ皆無であった。藤橋医院の入所者は、最初の訪問の際、あたたかく日中の若者を迎えてくれたが、若者たちをどう扱っていいのかぎこちなさも見られた。

しかし約一年かけて3度訪問するうち、入所者も徐々に心を開いてくれ始め、自分の生い立ちやハンセン病発病時の話などの自分史を日中の若者に語ってくれるようになった。実の母に「自殺してくれ」といわれたことや、ハンセン病が原因でずっと物乞いをしていたことなど、聞くものの言葉を奪う壮絶な人生を涙ながらに語る姿は、日中の若者に大きなショックを与えたが、翌日には穏やかな笑顔で、療養所内でとれたライチの実やふかし芋などを日中の若者に差し入れてくれた。

それら入所者の笑顔は、パンフレット「若者『ハンセン病』に出会う」にまとめ、また入所者の言葉は、「若者、中国にて『ハンセン病』に出会う」として編集中である（添付資料参照）。

「若者、『ハンセン病』に出会う」は、これまでのハンセン病関連冊子のイメージとはまったく異なり、笑顔があふれるものとなった。またハンセン病快復者の聞き書きは、日本のものは数多く出版されているが、海外のものはほぼ皆無であり、その意味で非常に貴重なものである。

日中の学生たちが力を合わせて療養所で行なったことは、入所者の家屋の修復や水道設備の工事だったが、これらの作業は、資金さえあれば行政でもNGOでも財団でも行なうことができる。しかし、パンフレットにまとめた入所者の笑顔や、過去の壮絶な人生を語ろうとする入所者の心を引き出したのは、日中の学生たちが力をあわせ、汗を流して土木作業に励む姿である。

### 日中学生のハンセン病理解に対する効果

ワークキャンプ終了後、参加した学生たちは写真展を開催し、本学OB、OGからなる商議員会や、人権を扱う授業などで中国での活動を報告した。自分たちの活動をハンセン病を詳しく知らない人々に報告するためには、ハンセン病に対するより深い理解が要求される。学生たちはこれら広報活動を引き受けることで、より深くハンセン病を学ぶ動機を得て、ハンセン病に対する理解を深めていった。

また日本の学生だけでなく、本プログラムに参加した中国の大学生も、プログラム終了後、中国の大学内で写真展を開催し、多くの参加希望者を得た。

### 日中学生の友好・信頼関係に対する効果

中国のハンセン病療養所の空き部屋に泊り込み、共同生活をしながら、力を合わせて土木作業をする中で、日中の学生間にも友情関係、信頼関係ができ始めた。プログラム終了後も、仲良くなった中国人を訪ねに、訪中する日本人学生も何人か見られる。日本のメディアでは連日中国の抗日デモが報道されたが、単なる抗日、反中意識に流されるのではなく、ワークキャンプで出会った友人関係・信頼関係を土台にして、日中の歴史問題を冷静に考えようとする機運も芽生えてきている。特に昨年8月のワークキャンプでは、日本国首相の靖国神社参拝の時期と

重なったことから、日中の学生間でも一部のメンバー間で靖国問題に関してお互い  
の見解を交換し合った。歴史問題と言う非常にデリケートな問題を、感情的に  
のみ捉えるのではなく、相互の個人的な信頼関係を土台にして考えていく機運が、  
中国のハンセン病療養所の中で芽生え始めている。

本プロジェクトが開始された第一回目のワークキャンプでは、中国人学生の参加  
はわずか二名であった。しかし写真展をはじめとする彼らの努力によって、現在  
は療養所に泊まりきれないほど多くの中国人学生が参加を希望し、本活動を通し、  
中国の若者にもボランティア活動が浸透しつつある。

### 広報における効果

日中の学生たちの中国ハンセン病療養所における活動をまとめたパンフレット  
「若者、『ハンセン病』に会う」をハンセン病検証会議委員をはじめとする人々  
に送付したところ、少なからぬ反響があった。とくに、ハンセン病検証会議を引  
き継いで 2005 年 5 月に設立される予定の「ハンセン病市民学会(仮称)」からは、  
貴重な海外のハンセン病への取り組みの事例として、またハンセン病に対する学  
生たちの熱心な取り組みの事例として、同学会での報告の機会を頂く打診をえた。  
中国の日中の若者の活動がよりいっそう社会に広がっていく第一歩として大き  
な効果があった。

### 他団体との連携

現在中国のハンセン病療養所で同内容のプロジェクトを行なっている団体は、慶  
応義塾大学看護学部の学生サークル Peace、複数の大学の学生たちによって運営  
されるボランティア団体の F I W C (フレンズ国際ワークキャンプ) 関東委員  
会・関西委員会がある。これら団体間にも横の連帯ができつつあり、4 月には  
Peace のメンバー、F I W C 関東委員会のメンバー合同で、東村山市にあるハン  
セン病療養所多磨全生園にて、入所者とともにお花見会を開催したり、合同で活  
動報告会を開催するなどしている。

### 他療養所での活動への発展

このプログラムに参加した学生が、2月のワークキャンプ終了後、主体的に新た  
なハンセン病療養所(外部からの支援が伸びていない療養所)を訪れ、現地ニー  
ズを療養所入所者ひとりひとりから聞き、新たな支援プログラムを計画し始めた。  
現在中国には 625 箇所 of ハンセン病療養所があるが、その多くは外部からの支援  
の手が届いていない。その 625 箇所のハンセン病療養所のできるだけ多くの療養  
所に学生たちの往来をもたらすために、このような学生の主体性は不可欠である。  
2004 年度の活動で、このような学生を輩出できたことは、本事業の最大の成果  
であった。

### 活動の課題

中国ハンセン病療養所藤橋医院との関係の継続

約一年かけて、中国広東省西部のハンセン病療養所「藤橋医院」に学生を引率し、三度ワークキャンプを開催した。上述のようにこの一年で療養所の人々は徐々に日中の学生に心を開いてくれ始め、日中の学生を自分の息子や娘のようにかわいがってくれるようになった。この関係を今後も維持すべく、ワークキャンプなどを手段として継続的な関係を維持していくことが望まれる。

### ハンセン病の基礎知識を学ぶ機会の充実

前述のように、本プロジェクトに参加した学生は、帰国後も自発的に写真展や報告会などさまざまな活動を展開している。しかしそれら学生の報告の仕方を見ると、ハンセン病に対する知識の面でまだまだ未熟な面も見られる。今後、教育機関としてよりいっそう、ハンセン病を学ぶ機会を提供すべく、2005年5月より、学内で「ハンセン病演習ゼミ」を開講する。なお、この演習ゼミは、中国のハンセン病問題に取り組む他団体のメンバーとの交流の場としての機能を持たせるために、対象を早大生に限定せず、一般にも開放する。

### 広報の充実

貴財団からの援助により、本プロジェクトの模様を写真を中心にまとめたパンフレット「若者、『ハンセン病』に会う」を発行した。これは前述のように、療養所に人々、日中の学生の笑顔のあふれる冊子となり、すくなくならぬ反響を呼んだ。

またこの冊子とは別に、療養所の人々が日中の学生に語った彼らの自分史を、中国人学生の協力を得ながら、現在編集中である。完成した際は、療養所の人々の意向を尊重しながら（実名を出すか出さないか、写真を載せるか載せないかなど）、当センターホームページその他で広く社会に伝えていく予定である。

日本では国内のハンセン病に関する書籍は充実しているが、海外のものになるとその量は非常に限定される。このような中、中国のハンセン病の現状を伝える資料は非常に貴重なものになると思われる。

### 当センターの手を離れ、独自に別の療養所で活動を準備している学生への支援

本プロジェクトに参加した学生のうち二名が、大学の手を離れ、自分たちの力で、他の療養所を調査し、ニーズを発掘し、同様のプロジェクトを実施しようと準備している（開催予定地：①広東省電白市タンチャン療養所、②広東省電白市グアンチュ療養所、詳細は別紙参照）。

中国には625のハンセン病療養所があり、外部からの支援の手の伸びていない療養所も多い。だが、それら多くの療養所すべてで、大学主催のプロジェクトを実施していくことは実質不可能である。このような現状の中で、学生が自ら立ち上がり、自らの力で支援プロジェクトを準備し始めていることは、非常に意義深い。彼らの活動を支援すべく、さまざまな形で彼らの活動をサポートしていく必要がある。